人生の楽しい終わらせ方

鳴瀬杳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人生の楽しい終わらせ方

【Ｎコード】
Ｎ３６９３Ｙ

【作者名】
鳴瀬杳

【あらすじ】
――生きてるって感じたくて、死ぬ方法探してるんだよ、あたし

「カナタはさぁ……クリオネに似てる」
「知ってる？　クリオネってさ、
……死んだら溶けてなくなるんだよ」

死にたがりの少女、サエキ。
生きたくない少年、カナタ。

死に方を探していたはずなのに、いつの間にか、
二人で生きたくなっていた――。

海の見える街で、静かに流れる
傷を舐め合う恋の話。

※野いちごにて連載中の作品を、書き直して投稿しています。

いち

目の前で、人が死のうとしていた。

助ける気になったのは、彼女の目に空が映っていたからだ　。

◇

空を見上げたら、真っ青で綺麗だった。

だからちょっと、死んでみようと思った。

※

「……さいあく」

かーんかーん、と踏み切りの音が響く中で、サエキは独り言を呟いた。

サンダルを拾い上げて、舌打ちすると、急にすべてのことがどうでもよくなった。

「お気に入りだったのになぁー」

オフホワイトのレースが可愛くて衝動買いした、ウェッジソールのサンダル。
何とでも相性がよくて、今年の夏はこれと黒いミュールをヘビロテだった。

でも、壊れてしまった。踏み切りを急いで渡ろうとしたら、線路に引っ掛かって足を捻った拍子に、ぽっきり。
まるで自分の現状を突き付けられてるような気がして、線路の上から動けなくなった。

あ、そうだ、死のう。

◇

どうせなら最後くらい綺麗なものを見ておくか、と思って、サエキは首を上に向けた。
風が通って、少し汗ばんでいた首筋を掠めていく。

髪が揺れた。
爽やかな日。
絶好自殺日和だ。

電車が迫り来る音を全身で感じるには、目を閉じた方が効果的だっただろう。
旋毛から爪先まで走る緊張感。タイミングを図るようなこと、死ぬ間際に、あまりにも野暮だ。
別に、選択の余地が、選ぶ自由があるわけではないのだ、自殺というものは。

自分の意志で、何かに殺される。
そのことに対する恐怖を煽るために、五感からの情報を限るべきだ。

それでもサエキは、空を見上げていた。
作り物めいた鮮やかな青を、睨み付けるように。

人の気も知らないでふざけんなよコノヤロウ。
今から死ぬからな、見とけよバーカ。

後になって聞けば、この時もし目を閉じていたら、サエキの人生は
変わっていた（終わっていた）らしい。

に

結果から簡潔に言えば、サエキは死ななかった。

ごおおぉぉぉぅ、と、風が鳴る。ぎゃんぎゃんいいながら、大きな鉄の箱が通りすぎた。

迫る電車が視界に入っても絶対に瞑らなかった目は、今なぜか固く閉じられていた。

「線路はやめときなよ」

轟音に混じって、高さの残る声が耳元で聞こえて、サエキは瞼を上げた。

少年が、口を開く。

「俺の友達、東京で駅員やってんだよね。大変なんだよ、掃除」

抑揚のない話し方。表情にも抑揚がない。

それが、人命救助なんて正義感と優しさの結晶のような今さっきの行動とは結び付かなくて、サエキは声を出すのを躊躇う。

「なんで……」

「はい？」

「なんで止めた」

少年は表情を変えずに答えた。

「言ったでしょ。友達が駅員なの」

「そんだけ？」

「あと、それから」

目が青く見えた。

そう言いながら少年は、サエキの目を覗き込む。　切れ長の、眠そうな奥二重。黒目が大きい。睫毛が長い。

サエキは、呑気に観察なんかしている自分に気付く。

「……でも気のせいだった」

「なんで目が青いと助けんのよ。外人好き？」

「いや、てっきりサエキさんは日本人だと思ってたから」

「は？」

そう声を漏らして、ようやくサエキは頭を使いはじめた。

状況を理解する必要と、この後のことを考える必要がある　。

まず、なんでこいつあたしのこと知ってんだ。

相手をよく見ようと、目線を顔から下に下げた。

服装が目に入る。ジーンズにパーカー。派手なピンクのチェック。

派手なチェック？

覚えのある表現に、サエキは「あれ？」と呟いた。

童顔に茶髪のショート。顔に特徴ないから、ピンクのパー　カー目印にしてください、派手なチェックの。

昨日の晩に見た、チャットの文面だ。

「はじめまして。カナタです」

小首を傾げる目の前の少年に、サエキは口を開けたまま、首を上下に振る。

「あー……あぁ！」

「サエキさんでしょ？」

「うん！」

色でわかった、と、サエキと合わせていた視線を、少し上にずらす。カナタの目印が目立つ色のパーカーなら、サエキの目印は髪の毛だった。

「メールで説明しただけなのによくわかったね」

「わかるよ。こんな髪の人、館町（やかたまち）に他にいないでしょ」

あまり明るくない茶色。

それだけなら至って普通、どこにでもいすぎてなんの特徴にもならない。

でも、サエキの髪は、空だった。

赤みを抑えた暗い茶に、深い青のメッシュ。

全体に散らばるように入ってはいるが、量のバランスがいいのか、汚ならしい斑とはほど遠い。

色合いは明るくないし、服装だって没個性的ないわゆる“流行り”のファッション。

それなのになぜか目を引くのは、夕暮れが終わっていく空のような、髪色のせいだ。

不思議な色合いの髪に目を奪われて、それが“サエキ”だと気付い

た。
次の瞬間には、踏み切りのバーを潜っていた。
黒いラインで縁取られた目尻。
気の強そうなメイクとは裏腹に、その表情にはなにもなかった。
真っ黒い瞳に空の色か反射して、髪と同じような藍色を作り出していた。
それが、綺麗だと思ったのだ。
だから、空が綺麗だったから、カナタは、サエキを助けたのだ。

さん

「つーかさぁ」

独特の脈絡のなさで、サエキは口を開いた。
というか、と前置きをしたが、別にそれまでなにか違う話題で話をしていたわけではない。
それ以前に、話をしてもいなかった。

「カナタ、すごい童顔なんだね。つーか女顔？　文面とか大人っぽかったから意外」
「……別に」

少しだけ顔を背ける。
自覚しているし、コンプレックスに思っているわけでもないが、わざわざ言われて気分のいいものでもないんだろう。
カナタにとっては、サエキの遠慮のない話し方も、気の強そうな見た目も、少しも意外ではなかった。

話を逸らすように、カナタは手に持ったサンダルを差し出す。
サエキは踵の壊れたサンダルで不安定に立って、顔を歪めた。

「これでいいじゃん」
「ちょっと、ありえないしこんなショボいビーサン」
「だって靴直してる間の間に合わせでし　ょ」
「だからってさぁ……。無駄な買い物はしない主義なの」
「この間、服買いすぎて今月ピンチって言ってなかったっけ？」
「服は無駄じゃないでしょ。着るもん」
「そんなに買って、全部着れるの？　そのうち、一日に3回くらい

着替えなきゃいけなくなるかもよ」

やりとりだけなら、チャットでの会話とほとんど変わらない。中身のない軽口の叩き合いで掲示板のレスが埋まるのを避けて、わざわざ二人限定のチャットルームを用意したのだ。
それはいつからかメールになり、自然と、コミュニケーションを取っている時間が長くなった。
カナタが十日ほど前、サエキの住んでいる館町に引っ越してきたのをきっかけに、会って話す方が早いんじゃ、ということになったのだ。
ただ、掲示板でもチャットでもメールでも味わえない、相手が笑っている、笑っていることを感じられる、という感覚が、どうも不思議だ。

カナタの目の前にいるサエキは、ウェッジソールのサンダルを3足ほど見比べながら、言う。

「用事ってなんだったわけ？　彼女の呼び出し？」

近くで店員が、行儀良く立っている。
「他のサイズもお出ししますよ」とか「色違いもございます」とか、隙あらば話しかけてくるつもりなんだろう。
カナタは、そういうテンプレ的な積極性があまり好きではない。

「違う」
「なにが？」
「彼女はいないよ」
「まぁ、リア充があんなとこ出入りするわけないか」
「サエキさんは？」
「いないよ。彼氏はね」

「彼女はいんの」
「さぁ、どうでしょうね」

ふうん、と、興味なさそうに返す。
サエキは、「これにしよ」と言って、棚の下に押し込まれた箱を眺めはじめた。
カナタも一緒に屈んで、聞く。

「いくつ？」
「22半」
「ちっちゃいね」
「うるさいなー、気にしてんの。そっちだってそんなにでかくないじゃん。何センチ？」
「いいだろ別に」

後ろに人が立つ気配がした。店員だろう。
カナタは自分の右横にあった箱を、「ほら、これじゃない？」と指差す。
箱の蓋をずらすと、コルクの厚底に、薄いベージュのトーションレースが見えた。
サエキが今履いている壊れたサンダルも、似たようなリボンの、似たようなデザインだ（きっと彼女にして見れば、全然違うんだろうけど）。

「……好みは意外と乙女だね」
「うっさいよ」

◇

「さっき、無駄な買い物はしないって言ったじゃん」

斜め前を歩くサエキが振り返る。
カナタは、キーホルダーを手に揺らしてみせた。
半眼とへの字口が、妙に可愛くない猫のマスコット。手足が細長くて、三角形の上に台形を重ねたような体型をしている。
箱を抱えてレジに向かったサエキが、戻ってきた途端にカナタに「レジ横に可愛いのあった。あげる」と手渡したのだ。

「こーゆうのは無駄じゃないのー」
「どこが？」
「お近づきのしるし。カナタに似てたから」
「え？　はぁ……どうも、ありがとう」

反応うっす！と、サエキが笑う。
カナタは感情が見た目に出ないというだけで、中身まで抑揚がないわけではない　。
でも、それをわかってくれる人は今のところ、一人もいない。

これに似てるのか俺、と、眠そうな猫の人形を眺めて、口を開いた。

「でも、やっぱ意味ない気がする」
「キーホルダー？　素直に受け取っとけよー」
「サエキのサンダルも。……どうせすぐ履かなくなるじゃん」

今が秋だから、という意味ではない。
この先ずっと、ということだ。

「誰か履くかもしんないじゃん」

「姉妹とかいんの？」
「えーと……今どこにいんのかわかんない姉ちゃんが」
「……どうせだから最後に全部売ってさっぱりしちゃえば？」

二人が話しているのは、将来のことだった。
近い将来。
そして、その先はない。

「うーん売るかぁ……」
「どのくらいになる？」
「服とか靴とか……ゲーム、ＣＤに漫画に……十五万は下らないかも。でもそのお金どーすんの？」
「最後に使えばいーじゃん」
「えー？　なにに使う？」
「演出？　十五万もあれば結構色々できるよ」
「例えばー？」
「んー……豪華ホテルの一室で、派手なドレス着て、とか」
「あ、ちょっとそれ色々考えよう。どんなのがいいかな」

来週の旅行、どこに行こうか。
ちょっと遠出してみたいよね。
そんな話をするノリで、カナタとサエキが話しているのは、人生の最期の彩り方だった。

「やっぱどーせ死ぬならさー、派手にいきたいよね」

よん

【自殺】今までにない死に方を考える【方法】

327　名前：名無し　：20XX／X／X（水）　23：18
ID：???
ちょっと聞いてくださいよう

328　名前：名無し　：20XX／X／X（水）　23：19
ID：???
今日、踏み切りに突っ立ってたら、助けてくれた人がいて

329　名前：名無し　：20XX／X／X（水）　23：21
ID：???
飛び込み？　なんでまた

330　名前：名無し　：20XX／X／X（水）　23：23
ID：???
や、特に理由ないんですけどー
なんとなく、今しんでもいいかなー？って

331　名前：名無し　：20XX／X／X（水）　23：28
ID：???
飛び込みは絶対やめた方がいい
汚いし失敗した時が最悪

332：名無し　：20XX／X／X（水）　23：35　ID：
???

俺が今日乗った電車も止まった
おかげで仕事に1時間半も遅刻

３３３　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（水）　２３：３９
ＩＤ：???
ね、ふつーそーゆう止め方するでしょ
なのにそいつ、俺の友達が駅員だからって
掃除大変だからやめろって
なんか馬鹿馬鹿しくなりましたw

３３４　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（水）　２３：４０
ＩＤ：???
無責任
つーか自分勝手

３３５　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（水）　２３：４３
ＩＤ：???
そんなとこで死のうとする方が自分勝手だろ
自分本意ではあるけど正論

３３６　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（水）　２３：５１
ＩＤ：???
てゆうか、今時自殺止めるとか
まじかっこよくないですか？w

３３７　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（水）　２３：５６
ＩＤ：???
確かに、なかなかいない
本気で死のうとしてる時に現れたらやだな

３３８　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（木）　００：０１
ＩＤ：???
でも訴えられても文句いえない

３３９　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（木）　００：０６
ＩＤ：???
裁判って時間かかるんじゃないの？
訴えてる暇あったら死ぬわ

３４０　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（木）　００：１１
ＩＤ：???
死ぬ前に金使うなら、何に使います？

３４　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（木）　００：２０　ＩＤ：???
風俗

３４２　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（木）　００：２５
ＩＤ：???
好きなもの腹一杯食う

３４３　名前：名無し　：２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ（木）　００：３２
ＩＤ：???
３４２＜＜
その後首吊りか薬飲んだら、全部垂れ流しちゃうけど

※

Ｆｒｏｍ：サエキさん
件名：なし
２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ　００：３２
本文：
なんでいきなり話変えちゃったわけ？
あれカナタでしょ笑

Ｔｏ：サエキさん
件名：Ｒｅ：
２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ　００：３９
本文：
別に。
てゆうかなんであんなこと書いたわけ？

Ｆｒｏｍ：サエキさん
件名：Ｒｅ：Ｒｅ：
２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ　００：４１
本文：
怒ってる？
ごめん

Ｔｏ：サエキさん
件名：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：
２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ　００：４９
本文：
怒ってない
でもやめた方がいいと思うよ、叩かれるのサエキさんだから

Ｆｒｏｍ：サエキさん
件名：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：

２０ＸＸ／Ｘ／Ｘ　００：５２
本文：
心配してくれてんのかー（・ω・）
明日ひま？

ご

「サエキさんはさ、一人で死ぬのが嫌なわけ？」

呟えていたストローを離して、カナタはぼそりと言った。
少なくともサエキが見たことのあるカナタはいつも、こんなふうに声低い喋り方をする。
声変わり前の中学生のような声を、気にしているのだろうか。

「んや、別に？」
「じゃあなんで俺と会おうとか言ったわけ？」
「なんとなくだよ。どんな人間なのか気になっただけ」
「そんな気になるほど面白い書き込みした覚えないけど」

目立つ方でもなかったじゃん、と呟いて、カナタはフォークを口に運ぶ。

サエキが立ち上げた『他にない死に方を考える』と題した掲示板に、半年ほど前のある日、新参らしい書き込みがあった。
丁寧語なのに生意気さが滲み出た物言いや、やけに幅広い知識。
多少アブノーマルな内容の掲示板なら、そのくらいの変わった人間はゴロゴロいる。
カナタが他と決定的に違ったのは、その物の見方だった。

自殺志願者の集まる掲示板で、自殺を勧めることは絶対にせず、かといって止めもしない。
方法に関しても、痛くも苦しくもない楽な死に方を考えるのではなく、タイトルの通り、まさに『他にはない死に方』を考えるための議論だけしていた。

生に対しても、死に対しても、何の執着もない。
生きなくていい。それだけ。
死にたいと思って積極的に死に方を探す自殺志願者たちが、カナタと比べれば、とても行動的に見えた。

「あたしさ。楽に死にたい、っていうの、ちょっと違う気がして」
「違うって？」
「だって死ぬんだよ。それって、決めるまでに散々悩んで考えて考えて考えて出した結論じゃん。あたしが思うに、自殺の一番大変なとこって、最初に自殺しようと決めるとこだと思うわけだ」
「ふぅん」

返事適当すぎ、というサエキの非難の声に、カナタは少しだけ眉を顰めてみせる。
場所はファミリーレストラン、時刻は夕方6時半。
あまりにも状況とミスマッチな会話に、真剣な返事なんて返していたら、明らかに怪しい二人だ。

「カナタはさ。楽な死に方なんて、一個も考えてなかったじゃん」
「あれは……別に、思い付かなかっただけで」
「うそ。考えようとしてなかったんじゃないの？」
「まぁ、確かに……楽に死にたいと思ったことはないよ」

サエキは一つ頷いて、オムライスを口に運んだ。
ふわふわトロトロとはほど遠い食感だが、構わない。食べられれば何でもいい、とまではいかないが、サエキは意外と味に頓着しないほうだった。
無表情でカルボナーラを頬張るカナタに、サエキは言う。

「すっごい不味そうな顔して食べてんね」
「うん、不味いからね」
「まじ？　あたし別にそうでもないけど」
「サエキさん、どんな舌してんの」

見るからにパサパサの卵と、不健康そうなケチャップ色のチキンライスを見て、カナタが言う。だがその表情にも声色にも一切の感情を感じさせないので、サエキも今一何も感じない。

「あたし、食べ物にはこだわんないことにしてんの」
「なんで？」
「だって死ぬまでに美味しいもの食べ過ぎて、いざ死のうとした時に、あーあれもう一回だけ食べときたいなぁ、なんて思って、死に損ねたら嫌じゃん」
「意思弱すぎだよ」

ろく

「ね、あのキーホルダー、使ってる？」

唐突に変わった話題に、一瞬頭がついていかなくて、カナタは口籠った。

口の中でもたもたと留まる冷たいパスタを無理矢理咀嚼して飲み下して、アイスティーを一口飲んでから、口を開く。

「サエキさんさ、いくらなんでも脈絡なさすぎ」

「カナタお行儀いいね」

「まともに会話する気あんの？」

「してるじゃん、今」

一体どんな会話をして育ってきたの、と言ったら、サエキがにこりと笑った。

真意がまったくわからなくて、カナタは片方の眉を動かす。

「キーホルダー、使ってるよ」

「ほんと？　何に付けてる？」

「……自転車の鍵」

「へー。自転車、乗るの？」

「乗ってない」

サエキが唇を尖らせて、「それ使ってるって言わないじゃん」と文句を言う。

子供みたいな仕草だと、カナタは思った。同時に、子供は絶対にしない仕草だろう、とも。

「結局ね、あたしが一番気になんのは、垂れ流しってことなんだよね」
「しょうがないよ、それは。人間の体がそういうふうに出来てる以上は」
「自室で首吊りとかしちゃったら、部屋中臭いとかひどいわけでしょ？　全部台無しじゃん」
「そんなこと言ったら、本当に綺麗な死に方なんてそうないよ？」
「一酸化炭素は？」
「死んだら筋肉が弛緩するからね。どんな死に方でもだいたい垂れ流すことに変わりないでしょ」
「薬も種類によるのかなぁ……やっぱしばらく飲まず食わずしかないのか」
「食べたものは薬でも飲んで出せばなんとかなるけど……水分はそうもいかないね」
「あ、そっか……」

ううん、とサエキが唸る。考え込むような、真面目な顔。
カナタは、鼻で溜め息を吐いて、言った。

「爆死は？　弛緩する筋肉も残らないよ」
「原型留めないのは嫌だよ、身元もわかんないかもしんないじゃん」
「わがまま」
「水死も見た目酷いし、最悪発見もされないしなー」
腕まで組んでぶつぶつと呟くサエキに、カナタは言う。

「川ならどう？」
「かわ？」
「どっか山ん中入っていって、上流の方から遺書何通か流すの。そんで薬か、腕切って水につける。垂れ流しても川に全部流れるし、ロケーションもいいし、遺書見つかれば探してもらえるし、川は浅いから発見はそんなに遅れない。血は残らず抜けるから真っ白になっちゃうけど、それはそれで綺麗」

抑揚のない声で語られる淡々とした説明は、それでもサエキの脳内に、一つの情景を浮かび上がらせた。
青空の下、ごうごうと流れる川に体半分浸かって、眠るように目を閉じている自分の姿。清々しい緑に囲まれた、真っ黒な服の、真っ青な死体。水に濡れた青い髪が顔に張り付いている。
神秘的で幻想的で、どこか耽美的な、美しい自殺現場。

「考えとく」

小さく笑って一言そう言ったサエキの意識は、その瞬間だけ、冷たい水の中で死んでいた。

しち

カナタの携帯電話に、知らないアドレスからメールが届いたのは、その夜のことだった。
数年前のあるアルバムの、表題曲のサビが、低音質で数秒鳴る。カナタが唯一好きな歌手の、唯一買ったＣＤだった。

誰からのメールかは、わかっている。
サエキだ。
ファミリーレストランでの気だるげな食事のあと、彼女に押しきられる形で、アドレスを交換したのだ。
今までだって何度もメールのやり取りはしていたが、それはチャットで教えた、サブアドレスでだった。

携帯電話は静かになる。
しかしカナタは、それを開く気になれなかった。
背面ランプが、青く点滅する。
二回光って、忘れた頃に、もう二回。その繰り返し。
それがうざったくなって、手を伸ばして、携帯電話を引っくり返した。

裏返してもなお隙間から漏れる小さな光に、カナタは、帰宅してから、電気をつけていなかったことを思い出す。
少し腰を浮かせばスイッチには届くが、それもしない。
何もしたくないと感じた。

どれだけ小さな光でも、まわりが真っ暗だと、こんなにも明るく感じるのだ。
こんなに小さな光が明るく感じるのは、まわりが真っ暗だからだ。

無性に苛々した。
長いシャツの袖を、捲る。
白いＴシャツだから、汚れれば洗濯が面倒だ。
脱いでしまおうかとも思ったが、それも嫌だった。

机の引き出しを、ゆっくりと開けた。
文房具やなんかが無造作に詰め込まれたそこに、あまりに自然に溶け込んでいる、武骨なそれ。

かち、かち。久しぶりに聞いたその音をＢＧＭに、思い浮かんだのは、なぜかサエキの顔だった。
死にたいと願う少女。
そのくせ、頭に浮かぶのは、唇を歪めて、涙をぼろぼろ流して、恐怖に怯えた顔で命を乞う姿。

（苛々する、）

残像を掻き消したいと思った。できるだけ荒々しく、できるだけ残酷に。
暗い部屋で、裏返された携帯電話の灯りが、どこかで光る。

血が煮えるような感情の昂りを、治めるには――血ごと流し出すのが一番だ。
カナタは、カッターの刃を、細い手首に添えた。

はち

（最近、連絡ないな）

いらっしゃいませぇ、とやる気のない声を聞きながら、サエキは携帯電話を見た。
夕方から入っていたアルバイトも、もう終わりだ。忙しくはなかったが、疲れはした。

夏の終わり、コンビニエンスストアの店内は寒い。外が涼しくなったのだから店内の空調の設定温度も上げればいいものを、なぜか世間は、女性の体に優しくない。
Tシャツの上に羽織ったパステルイエローのパーカーに、思い出したのは、コンビニ店員なんかよりもっとやる気なさげな、あの顔だった。

お疲れさまです、と、声をかけて、お菓子の棚を眺める。
チョコレート菓子とスナック菓子で悩んで、「太るよ」と言うカナタの声を想像した。あの無表情で、でも言ったあと、ほんの少しだけ笑って。

（電話、してみっかな……）

カナタなら、出ないだろうと考える。
メールの返事だって半日遅れが当たり前なのだ。
コミュニケーション能力の低さなら、サエキが今までに会った人間の中で、群を抜いている。

結局カゴに菓子を二つ入れながら、携帯電話を取り出す。
十日ほど前にはじめて本アドレスで送ったメールの返事は、まだ来ていない。

雑誌の表紙を流し見て、飲み物のコーナーで一度立ち止まる。小鳥がサイレンを真似したような音と、「らっしゃーっせぇー」という、舌の回らない掛け声が響く。

（なんか忙しいのかな）

それとも、避けられているのか。
サエキの頭では、他にメールを返さない理由は思い付かない。

カナタの声が聞きたい。
自然にそう思っていた。自然にそう思ったことに、驚いていた。
やる気なさげな、少し眠たげな、生意気そうな高めの声。ぼそぼそと、口を大きく開けない話し方。
声が生意気なら、言うことはもっと生意気だ。一応敬称をつけてはいるが、そこに年上の人間に対する遠慮や敬意は、少しも見られない。罵詈雑言も平然と口にする。

それでも、今無性に、カナタの声が聞きたかった。

（やっぱ、電話しよ）

1．5リットルの緑茶のペットボトルを手に取る。
そして、弁当の棚へと、振り返った時だった。

思わず、声が出た。

「……カナタ？」

切れ長のたれ目はこちらを向いて、一瞬大きめに開かれた。
そしてそのあと、カナタの顔に浮かんだ表情は、『しまった』とでもいうようなものだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3693y/

人生の楽しい終わらせ方

2011年12月11日14時58分発行